

謎に包まれた徳川家康の宇都宮滞在

栃木県立博物館 学芸員 飯塚 真史



徳川家康像(栃木県立博物館蔵)

徳川家康が、死後に日光東照宮に祀られたことは周知のことであるが、生前に下野、特に宇都宮を訪れていたことはあまり知られていない。今回は謎に包まれた徳川家康の宇都宮滞在について紹介したい。

最初の滞在は、天正18(1590)年である。この年、7月5日に北条氏を降した豊臣秀吉は、20日に江戸に入り、宇都宮(同26日)8月4日)を経由して会津(8月9日)12日)に下向し、関東・東北の諸将を配下に収めるとともに、刀狩や検地などの諸政策を実施した(宇都宮仕置・会津仕置)。直前に関東への国替えを命じられた家康は、仕置への帯同は免除されている。この時期の家康の行動は、いくつかの資料からうかがい知ることができる。まず、7月28日付の家康宛の豊臣秀吉朱印直書では、秀吉が宇都宮の様子を家康

に伝えていることから、この時点で家康が宇都宮に来ていないことが確認できる。翌29日に今度は家康から秀吉の命令に対する請文が提出されて、これには、秀吉直書への御礼と秀吉の指示を承諾したことが書かれている。直書ではこの指示の件について触れていないため、秀吉直書と請文の間の29日に秀吉と対面し、請文にある指示を受けたと推定される。これ以外にも家康が宇都宮で秀吉と対面したことがうかがわれる書状が確認できる。一方、家康の江戸帰還の日は、8月1日の家康の江戸入りが「八朔の江戸御打ち入り」として後世まで記念されていることから、家康は7月29日に宇都宮で秀吉と対面し、8月1日までに江戸城に戻ったと考えられる。請文の内容から29日の対面では、家康は秀吉から関東支配に対する指示を受けたと推測される。

二度目の滞在は、天正19(1591)年である。天正18年8月以降、豊臣秀吉による仕置の不満から奥羽各地で一揆が頻発する。秀吉は翌19年4月に一揆討伐を決定し、6月に奥州奥郡仕置のため諸将に出陣を命じ、豊臣秀次を大将とした鎮圧軍の副将として家康を任じた。家康は秀次とともに、一揆鎮圧後の知行割等をおこなっている(奥羽再仕置)。この時の家康は、まず、7月19日に江戸を出発し、岩槻に向かったとされる。その後、27日に白河に到着して、7月27日に白河に到着したとすると、通常の行程であれば25日頃に宇都宮を出発していたと考えられる。一方、帰路については、10月16日には本宮か二本松辺りまで戻っていると考えられる。その後、27日に古河まで戻っている。27日に古河に到着する以前の数日間には下野国内に滞在していたと考えられ、通常の行程では、25日に大田原、26日には宇都宮に滞在していたと推測される。

相談随時
案内進呈

あなたの本づくりをお手伝いします。

一冊のぬくもりを大切にしたい。
これが私たちの編集コンセプトです。

図書出版・企画・編集・制作

36th
SINCE 1985

随想舎

まずは
お電話を

028-616-6605

<http://www.zuisousha.co.jp>

〒320-0033 栃木県宇都宮市本町10-3 TSビル

総務・営業部 1F TEL.028-616-6605 FAX.028-616-6607 編集・制作部 2F TEL.028-616-6606 FAX.028-616-6608 e-mail: info@zuisousha.co.jp